

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

臨時増刊号

第 414 回 何もしないのは立派な犯罪！菅直人辞めるべし！！

2011.4.13

先人たちの貴重な体験に、何故学ぼうとしないのか？

関東大震災の時の政府の対応に、先人達の貴重な教訓がある。

・・・・・・・・1923年（大正12年）9月1日午前11時58分44秒、
マグニチュード7.9の激震が関東一円を襲った。
下町を中心に東京には焼け野原が広がった。
東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、静岡、山梨の1都6県に被害は及び、
死者・行方不明者は死者行方不明14万2,800人（東京10万7,500人、神奈川3万3,000人、他県2,300人）。家屋の全焼38万1,000戸、全半壊17万4,000で、被災者は実に340万5,000人に及んだ。
当時の日本の国力を考えれば、どれほど巨大な災厄だったろうか。
関東大震災である。・・・・・・・・

この時、実は「首相不在」中の震災でもあった。
直前の同年8月24日に加藤友三郎首相（1861～1923年）がガンのため在職中に病没し、
内田康哉（1865～1936年）外相が首相臨時代理に就いた。
同29日に**山本権兵衛**元首相に組閣の大命降下があり、震災当日は、山本はまだ組閣構想中だった。

内田職務執行内閣は、地震の翌日9月2日中に、
「臨時震災救護事務局」を設けるなど救援に懸命に動いた。
その日の夜、
東京・赤坂離宮の「萩の茶屋」で、
ロウソクの灯りの下で親任式が行われ、山本内閣は発足した。
山本内閣は、内田職務執行内閣を引き継ぐとともに、
内相の**後藤新平**（1857～1929年）がその日から復興計画づくりに着手した。

震災からわずか1週間後の同月8日には、
後藤の命を受けた**「内務省都市計画局が復興計画の第1案」**をまとめている。

9月12日の帝都復興の詔書は、
東京を単に復旧するのではなく、復興する方針を打ち出した。
政府は、大規模な区画整理や拡幅の大きい道路の建設などで
災害に強い近代都市に生まれ変わらせようとしたのだ。

関東大震災から18日後の23年9月19日、
山本首相が総裁で、委員は国務大臣待遇を受ける「帝都復興審議会」を設けた。
後藤ら閣僚、**渋沢栄一**(1840~1931年)ら財界人、
伊東巳代治(1857~1934年)ら枢密顧問官や学者に加え、
野党・立憲政友会総裁の**高橋是清**(1854~1936年)や
野党・憲政会総裁の**加藤高明**(1860~1926年)、
それに貴族院の最大会派「研究会」の幹部らが加わっている。
政党内閣ではなかった山本内閣は、議会勢力を議論の土俵に乗せたのだ。

震災から26日後の同月27日には、後藤が総裁の「帝都復興院」が設立された。
「帝都復興院」の傘下で有識者や各官庁の幹部で構成した「帝都復興院評議会」を儲け、
実務を遂行させた。

**関東大震災での山本権兵衛内閣の対応と比べ、
菅直人内閣のなんと劣ることか。**

菅首相は4月11日にやっと
有識者や地元自治体の代表らでつくる
「復興構想会議」(議長・五百旗頭真防衛大学校長(67))を
作ったが、方向性を示すのは4月末だという。
震災後1ヶ月も立って、形通りの組織を作り、
さあ、何をやるかと相談するらしい。
こんなことをやるという相談を4月末までやって、
それから徐々に動き出す・・・

菅直人やその取り巻き民主党に、

被災者の心情をもてあまし、その生命すら危険にさらす、

そんな権利がどこにあるのか！

何もしないというのは立派な犯罪だ！

格式ある日本国と、誇り高い日本人を
この人達は滅亡の地獄に導かんとしている。

参考：産経ニュース

<http://sankei.jp.msn.com/politics/news/110409/plc11040909500005-n1.htm>